

# 東京バッハ合唱団 月報

【第 672 号】 2018 年 6 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 672

June 2018

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 目白聖公会創立 100 周年記念 イースター・コンサート

目白聖公会創立 100 周年実行委員会 植野 幸和 (目白聖公会聖歌隊長)

主の平和 主のご復活をお慶び申し上げます。

山手線目白駅から徒歩 10 分、新宿区下落合の地に英国教会の流れを汲む「目白聖公会」が創立されたのは 1918 年(大正 7 年)12 月 1 日、降臨節第 1 主日のこと。そして本年、創立 100 周年を迎えました。

これまでの間、時代と社会の変化にありながらも、この地でキリストの愛の福音を宣べ伝え、また地域との関わりを深めつつ、「街の中の教会」として歩んで来ました。100 周年という大きな節目を迎えた今、私ども目白聖公会は、また新たなこれからの 100 年に向かって、神とともに、神の愛の器として世に仕えていく決意を新たにしたいと考えています。

目白聖公会では、2016 年から創立 100 周年実行委員会を設立、創立 100 周年の迎え方について検討を重ねて、具体的な実施計画を立てました。以下、計画の概要を記しますと、

- ①記念イースター・コンサート……2018 年 4 月
- ②記念講演会……2018 年 9 月
- ③記念礼拝・祝会……2018 年 12 月 2 日、降臨節第 1 主日
- ④クリスマス賛美の音楽会……2018 年 12 月 16 日
- ⑤記念誌発行……2019 年 4 月 21 日、復活日
- ⑥新しいオルガン設置……2019 年

そして、この度、主のご復活を祝い、目白聖公会の創立 100 周年を寿ぐ記念演奏会は、東京バッハ合唱団によるバッハのイースター・カンタータの奉唱になりました。

東京バッハ合唱団は、主宰される大村恵美子先生により 1962 年に組織され、本年で創立 56 周年を迎えられました。そして、組織されて間もない 1964 年 5 月から目白聖公会の会館ホールを、毎週、その練習場所として、研鑽を積まれてこられました。

そこで、私ども目白聖公会は、共に半世紀以上を歩んで来られた、創立 100 周年に相応しい東京バッハ合唱団に、記念演奏会を開催して頂けないかと思ひ、お声を掛けさせて頂いたところ、大村先生を始め合唱団員の諸兄姉も、快くその申し出に応じてくださり、記念イースター・コンサートの開催に至りました。



■目白聖公会の創立 100 周年に、バッハの復活祭カンタータ 3 曲を演奏。(2018 年 4 月 8 日、目白聖公会礼拝堂。撮影：千葉光雄・団員)

4 月 8 日(日)復活節第 2 主日 [プロテスタント教会暦では、復活節<後>第 1 主日。編集部] 午後 2 時、五月晴れと言っても良いほどの爽やかな快晴のもと、イースター・コンサートは開始されました。

演奏されたカンタータ 3 曲は、すべて復活節の期節のためにバッハが作曲した作品。

I. カンタータ第 42 番《同じ安息日の夕べ》より、(2)レチタティーヴォ(テノール)、(3)アリア(アルト)、(7)コラール

II. カンタータ第 4 番《キリスト 死に繋がれしが》全曲(1)シンフォニア、(2)合唱、(3)二重唱(ソプラノ/アルト)、(4)アリア(テノール)、(5)合唱、(6)アリア(バス)、(7)二重唱(ソプラノ/テノール)、(8)コラール

III. カンタータ第 31 番《天は笑い 地はどよめく》より、(8)アリア(ソプラノ)、(9)コラール

そして、演奏後に、カンタータ第 42 番第 7 曲のコラール《われらに平和を この時に賜え》をバッハ合唱団の皆様と、聴衆である目白聖公会教会員が全員合唱できたことは、心に残る思い出となりました。

大村恵美子先生の訳詞による日本語の演奏と、大村健二氏による懇切なプログラム・ノートにより、バッハのカンタータに心から酔いしれた 1 時間半のプログ

### 月報 6 月号 CONTENTS

- ・目白聖公会創立 100 周年に讃美の歌(加藤剛男) … p.2
- ・要約「カントル・バッハ」最終回(松尾茂春) … p.3-4

ラムでした。合唱団の皆様、器楽奏者の皆様、大変お疲れさまでした、そして、有難うございました。心から御礼申し上げます。

最後に、目白聖公会のシブリアン聖堂が、建造後 88 年の木造ながら、音楽的な響きが良く、合唱や室内楽の演奏に相応しい聖堂であることをバッハ合唱団の皆様にも味わって頂きたいと考えて、今回の企画を立てました。団員の何人かの方々から「歌っていて、気持ち良かった！」とのご感想を頂き、心の中で密かに快哉を叫びました。

## 目白聖公会創立 100 周年に、讚美の歌

加藤 剛男 (団員)

昨年の 9 月、目白聖公会聖歌隊長・植野幸和様より次のようなご提案がありました。「2018 年は、目白聖公会の創立 100 周年にあたります。日頃練習場として利用されている東京バッハ合唱団に、是非バッハの演奏をして欲しい」というものでした。

実は、目白聖公会の会館ホールをお借りしたのは、東京バッハ合唱団が創立されて 2 年目の 1963 年 4 月 29 日 (月) に、第 1 回バッハ・ゼミナールを実施したときが初めです。講師の深津文雄先生のご健康が思わしくなく、第 2 回目からは、辻一先生が講師をお引き受けくださることになりました。その後、翌 1964 年 5 月からは、この目白聖公会の教会員であり、長く長老をされていた辻一先生のご紹介で、会館ホールを練習会場としてもお借りできるようになり、今年ですでに 54 年に及びます。まことに感謝にたえません。

大村恵美子先生はじめ団員と相談の上、この光栄あるお申し出に、今までの御礼の思いもこめて、快くお答えしようということになり、その旨ご返事いたしました。

当日の曲目等については、植野様が詳しくご報告くださいましたので、演奏者名のみをここに書き加えさせていただきます。

器楽アンサンブル：Ob 桜井哲雄、Vn 中川典子、VC 木島洋一郎。オルガン：小久保美希、合唱：東京バッハ合唱団、指揮：大村恵美子。(チェンバロ調律工房の移動式パイプオルガン使用)

事前に、礼拝堂の見学会を設けてくださいました。礼拝堂は、1929 年に建てられたロマネスク様式の歴史的建造物で、堂内 1 階の両側窓および 2 階ギャラリー中央には「聖家族の神殿奉獻」など、数多くの美しいステンドグラスが掲げられています。

演奏会当日の午後は、爽やかな好天に恵まれました。このたびの演奏曲目は、すべて復活節のためのカンタータです。木彫を基調とする落ち着いた教会で、天井は高く、響きが上に向かって吸い込まれていき、それ

が聖堂全体にゆきわたり、実にしっとりとした音楽を作ってくれます。

カンタータ第 42 番《同じ安息日の夕べ》(抜粋) は、オーボエと弦合奏だけの静かな音楽(バッハ 40 歳の作)で、復活したイエスが弟子たちに語りかけた言葉が中心のカンタータです。第 3 曲のアルト・アリア「二人または三人が、私の名によって集まっている所には、私もその中にいる」とイエスの慰めに満ちた言葉が、アルトの豊かな声量の斉唱で歌われると、まさに平安そのものが心に満ち溢れる思いがいたしました。またコラール〈われらに平和を この時に賜え〉では、特に後半の〈平和とよき政治に導きたまえ〉の歌詞に来ますと、現在の世界情勢の緊迫を覚え、為政者に対する平和の選択を覚えながら、祈り心で歌わずにはいられませんでした。

第 2 曲目のカンタータ第 4 番《キリスト 死に繋がれしが》(全曲) は、バッハのカンタータの中でも最も有名な作品の一つ。バッハ 20 歳台初期の作で、神の子キリストの復活を讃えます。第 2 曲目の合唱から第 8 曲目のコラールまで、全節の最後に〈ハレルヤ〉の言葉がきます。キリストの死と復活したキリストを讃えるバッハの音楽的解釈が、深く表現されています。堅い信仰と力強い決意と同時に〈恵みのみことばに〉の個所が強く心を打ちます。

第 3 曲目のカンタータ第 31 番《天は笑い 地はどよめく》(抜粋) は、バッハ 30 歳の作。復活に与るわれわれ一人ひとりの内面に深く入り、死と永遠のあこがれを歌っています。8 曲目のソプラノ・アリアでは、オーボエの慰めに満ちたオブリガートが深く心にしみました。その中のコラールの定旋律を、バッハの指定では弦楽器のユニゾンになっておりますが、このたびの演奏では、大村恵美子先生は、ソプラノの背後で男声ユニゾンが次の歌詞で歌うことを指示されました。

“終わりの時に 進みゆくわれを

イエスよ導きませ 見棄てたもうな

われをながみ手に ゆだねまつれば

主は護りたまわん”(ニコラウス・ヘールマン)

主にゆだねる人生を深く心に覚えながら歌うことができました。

満堂の聖シブリアン聖堂の中で、イースター・カンタータのみ 3 曲を歌えた幸せを心一杯に感じました。演奏会が終了してからの目白駅近くでの二次会で、楽器奏者の方々、目白聖公会の方、団員数名で食事をしながら、「楽器奏者は、合唱から“歌う心”を学ぶ」と言われた言葉は感銘を受けました。また逆に合唱団員は、楽器奏者の方々から音楽性、テンポとリズム感、音程、曲のフレージング、構成力等を学びます。お互いにバッハの音楽を高め合う感動的な演奏会でした。

目白聖公会の皆様、このような生涯に残る演奏の機会をお与えいただき、心より感謝いたします。

## 要約『カントル・バッハ』 連載[6] 最終回

### マニーフィカト (わが魂は主をあがめ)

ポール・デュ・ブシェ [著] 大村 恵美子 [訳]

要約・紹介：松尾 茂春 (団員)



■宮廷での演奏会が行われる夕べの時、バッハの到着が知らされました。フリードリヒは居合わせた音楽家たちの方を振り向き「諸君、老バッハの到着だ！」と言い放ちます。……

## 第6章 音楽の捧げもの

(フリードリヒ大王の客人、歿後)

晩年のバッハは社会生活においては影の薄い存在となりました。自身の任務に関わる活動からは次第と遠ざかり、内なる声に近づいていきます。活動的な生活の糸を結びつけていた絆は緩められ、《カノン風幻想曲》(BWV 769)、《音楽の捧げもの》(BWV 1079)、《フーガの技法》(BWV 1080) 等、抽象的で主張のはっきりした、純理的な作品群の横糸を織っていきます。

### ・1747年5月、バッハはフリードリヒ大王の客となる

バッハの次男、C. Ph. エマーヌエルは、プロイセンのフリードリヒ大王のオーケストラでチェンバロ奏者をつとめていました。そのプロイセンの王からバッハへの招待状が届きましたが、バッハは答えを延ばしていました。オーストリア継承戦争のドイツ側の最後の事件として、1745年にプロイセン軍がライプツィヒを包囲したからです。戦争を憎むバッハは最後のカンタータの一つとして《平和の君 イェス》(BWV 116) を作曲します。戦争が終われば、その時にポツダムのフリードリヒ 2 世の宮廷を訪問しようと考えていました。それは、エマーヌエルに生まれたバッハの孫、J. アウグストゥスとの初対面の時ともなります。

1747年5月7日、宮廷での演奏会が行われる夕べの時、バッハの到着が知らされました。フリードリヒは居合わせた音楽家たちの方を振り向き「諸君、老バッハの到着だ！」と言い放ちます。いくぶん興奮しながらバッハを引っ張って、手に入れたばかりのジルバーマンによる7台のピアノフォルテを見せ、それらの試

奏を勧めます。バッハは全員をうっとりさせるような即興演奏をした後、次にフーガ主題の提示を王に求めました。王が一つの主題を与えるとバッハはすぐに3声のフーガに展開、それがあまりに生き生きとしていて緻密だったので、フリードリヒは夢中になって同主題に基づく6声フーガを頼みました。これに対してバッハは自身で選んだ主題に基づく6声フーガを威厳のある造形深い様式で即興演奏し、フリードリヒは心をうばわれます。

ライプツィヒに戻ったバッハは、さらに先の王の主題による純粹にポリフォニックな一群の作品を作曲します。3声のフーガ1曲、6声のフーガ1曲、トリオンナタ1曲、カノン10曲。冒頭に“Quarendo invenietis” (探せ、さらば見出さん) との大胆不敵な言葉を書き記し、《音楽の捧げもの》Musikalisches Opfer という題名で印刷させ、1747年7月に王に贈りました。

### ・R. I. C. E. R. C. A. R.

この楽譜の見返しの頁には、“Regis Iussu Cantio Et Reliqua Canonica Arte Resoluta” (王の命により、主題とその他の部分はカノンの手法によって解決される) と書かれています。ここで“カノンの”は単にカノンを含むという意味にとどまらず、「可能な限りの最善の仕方」を意味します。この献辞の各単語の頭文字を綴ると“探す”という意味のイタリア語“RICERCAR”になります。そしてその通り、この作品には“探す”べきものが多く含まれているのです。

### ・バッハは名高い音楽学術協会<の会員となる

コレギウム・ムジクムの出身者ローレンツ・クリストフ・ミツラーが設立した音楽学術協会は優秀な音楽家たちから成り、難解な理論的問題を扱う月刊誌を発行していました。1740年以来関心を持ちつつも所属をためらっていたバッハでしたが、ヘンデルが11番目の会員となることを承諾した後、2年待機して14番目の会員として登録されました。

この“14”はバッハを表す数として知られています。バッハが数と音楽の関係を重視し、数との関わりを大切にしていたことを示す例は他にも多くあります。たとえば、《平均律クラヴィーア曲集 第1巻》を開始する第1のフーガ (ハ長調 BWV 846) のフーガ主題は、14個の音で形づくられます [註：以下の2つの譜例は、いずれも要約・紹介者による挿入]。



また、視力を失った死の床で、娘婿のアルトニコルに崇高なコラール《主よ、いま御身の御座にわれ進みいで》を書き取らせながら、バッハはその第1行に14の音符を、旋律全体に41の音符をあてることを明言するのです。 [註：アルファベットに、A=1、B=2、C=3、D=4、……と順に数字を当てると、BACHは2・1・3・8であり、4文字の合計が14となる。同じくJ=9 (IとJは同字とされる)、S=18なので、J. S. Bachは、9+18+14=41である]

## ・《フーガの技法》、そこにあるのは秩序のみ

死の3年前、バッハは単純な主題の最初の小節を書き、その主題を絶対美の音楽の中に永遠化します。1747年《音楽の捧げもの》を完成させた後、《フーガの技法》の創作に没頭しました。《音楽の捧げもの》ではカノンの理念が支配しているのに対し、ここではフーガ的書法のあらゆる可能性が試みられています。

《フーガの技法》は、《音楽の捧げもの》や《カノン風変奏曲》と同様、音楽学術協会の“科学的交流”の機能を果たすことになりました。バッハの最初の計画では24のフーガ(4曲×6グループ)から成り、1749年に終わるはずでした。しかし1750年3月21日、65歳になったバッハは“名誉会員”として交流の義務を免除され、できあがった曲は21曲で最後の曲は病により中断を余儀なくされてしまいました。《フーガの技法》は、語りつくした末に沈黙した音楽の宣言、音楽的結晶の建築物、音楽的世界から抽象された純粋性の建築物に還元された音楽の宣言です。《フーガの技法》を聴き取ることの極限——そこでは、死の成就という、もう一つの完成に近づいたものだけが聴くのです——へと導いた完成に、きわめて近いのです。

## ・線と逃走

《フーガの技法》では、1つのフーガから次のフーガへと主題が提示され、反行されます。声部や主題は重なり合い、限りなく応答し合います。1つの鏡の中の光線のように、2重、3重、4重にもなったあらゆる種類のフーガやカノンが、互いに反射しあいます。あらゆる可能な形式の元に組み合わせられ、絡み合った主題と対位主題とが1つの建築物を構成し、その幾つもの線は、終わりなく、しかし絶えず再発される螺旋となって、空に向かって消え行くように思われます。

ついに、21番目の荘重なフーガは、死が近づいて中断されます……。もはや引き返せぬことを悟ったように、バッハは署名します。彼の名前 B.A.C.H. (変ロ、イ、ハ、ロ)の文字によって作られている、第193小節から始まる主題は、苦悩に満ちた半音階の順次進行でした。



## ・闇の試練

1749年の初めには、バッハはもうほとんど盲目でした。バッハの健康の衰えを知った市参事会は、「音楽監督セバスティアン・バッハが故人となった場合の、聖トーマス教会の来るべきカントル職」として1749年6月8日、ハラーという人物を公に審査しました。最後のいじめといえるこの振る舞いは、バッハにとっては最後の闘いの場となりました。最愛の弟子の一人 J・クリストフ・アルトニコルとその年結婚した娘エリーザベト・ユリアーナの初子の洗礼式に立ち会うため、10月には最後の旅行さえ試みようとするのです。ハラー

は出身地ドレスデンに一旦戻りますが、バッハにとって闇は深まるばかりでした。

1750年3月28日、4月7日、英国国王の「眼科医」、勲爵士ジョン・テイラーによって2度にわたり角膜の手術が行われ、結果としてバッハの視力は完全に失われてしまいました。この人物は2年後にはヘンデルに白内障の無駄な手術を施し、結果、偉大なドイツの作曲家2人を盲目にしてしまうこととなります。

## ・主よ、いま御身の御座にわれ進みいで

生涯の最後の数か月を完全な失明のうちに過ごしたバッハは、2度の手術と有害な薬の処方により体を痛め、苦しみました。しかし作曲はやめません。娘婿アルトニコルと新しい弟子の J・ゴットフリート・ムーテルが付き添い、筆記、筆写します。とりわけ彼らは《オルガンのための18のコラール》をバッハと共に見直しました。

7月中旬頃、バッハはアルトニコルに素晴らしいコラール《主よ、いま御身の御座にわれ進みいで》(BWV 668)を書き取らせました。18日、バッハは突然視力を取り戻しましたが、数時間後に激しい発作を伴う卒中の発作に見舞われます。22日、彼は聖餐にあずかり、6日後の7月28日火曜日の夕べ8時半に息を引き取りました。

## ・アンナ・マグダレーナ、孤独

バッハへの賞賛の辞を送る暇も惜しんで、ライプツィヒ市参事会はハラーをカントルの地位に任命します。

バッハが死んで、アンナ・マグダレーナは惨めな経済状態に陥りました。彼女は夫の給料の6か月分の支払いを願い出しましたが、市参事会はバッハがこの地位についた28年前の持ち出し、「2月から仕事を始めて1年分の給与を得たので、未亡人になってからの分は21ターラー21グロッシェン差し引かれることとなります」と答えました。

遺産は配分され、音楽関係の本と作品手稿はフリーデマンとエマーヌエルの間で再配分されました。

アンナ・マグダレーナは、以前自分に支給されていた3分の1の額で、未婚の義理の娘カタリーナ・ドロテアと2人の娘、カロリーナとズザンナを養育しながら生活します。生活のため、セバスティアンの残した楽譜さえ売らねばならず、市参事会は「彼女の窮状を考慮して」、《フーガの技法》を40ターラーで買い上げました。1760年、悲惨な状態の内に、アンナ・マグダレーナは息を引き取りました。【完】

〔晩年のバッハが招かれたポツダムには、東京バッハ合唱団のヨーロッパ演奏旅行で幾度か訪れる機会がありました。フリードリヒ2世の命によって建てられたサン・スーシ宮殿や庭園を見学した他、1993年の第3回演奏旅行では、8月15日にポツダムの救世主教会で演奏。曲目はカンタータ196番、39番、モテット5番、カンタータ78番、そしてモテット1番でした。〕